平穏死を聴いて

7/23/2013

北村社会福祉士事務所
代表　北村弘之

著書「平穏死のすすめ」を書かれた石飛（いしとび）幸三さんは、世田谷区にある特別養護老人ホームの常勤医師です。その先生の話を聴く機会がありました。

先生の言われている「平穏死」とは、「老衰に対し何もしないことが免責される概念」ということでした。つまり、人間は自然に眠ったままに死んでいくものだということです。現代の医学では、病に困窮すると酸素マスクや胃にチューブを入れて栄養を補給したりすることが当たり前のようになってきました。しかし、それらはあくまでの急場しのぎや一時的な代替手段だというのです。

先生は、40 年以上外科医として平穏死とは逆の延命至上主義の現場で働いてこられ、その後、老人が終の住処として過ごす特別養護老人ホームの常勤医として接触されてから、老人の最期までが延命治療とはおかしいと気づいたそうです。それは、口から食べられないとうのは、老衰の終点であるということを意識したことにあったようです。

現代に生きる人は、核家族の少人数世帯に育ってきました。死の多くは病院で迎えることによって、祖父や祖母また両親の死に直面することは少なくなっています。死がどのようにやってくるのか、死に対してどのような覚悟をしていればよいのかわかっていません。せいぜい棺に入った亡くなった人の顔を拝むだけですが、そこにはあの世行きのきれいな顔があるだけです。実際、私も両親や義理の両親でその経験はありますが、死の訪れに対処する方法やお別れ仕方にはほとんど疎い状態でした。先生は、現代の日本人は、物質的には豊かになった代償として、精神的な衰えが「人間の死」を尊いものと考えなくなったのではないかと発言されていました。また、日本人の多くは仏教徒であるにも関わらず、葬式の時だけ僧侶にお世話になる葬式仏教が中心となっているのではないかとも発言されていました。本当にそうだと思いますが、檀家のお寺では、正月、春と秋のお彼岸、旧盆の時には法話が開催されており、法事や葬儀で御世話になった際には、お釈迦様の話や生きることの大切さを話されていますので、私にも家族にもよい影響を与えているのではないかと思っています。

先生の話された中にこんな話がありました。それは「最期の代謝」というものでした。あるご老人は最期を迎え、一週間何も飲まずの状態であったが、おむつにはちゃんと尿があったと。自分の身体を楽にして、最期は天に昇っていったというものでした。

もっと、我々は生きる上で、また死に至るまでの自然の摂理を学ばなければならないと思った次第です。

以上